

「見る」活動から始める創作ダンス学習

体育教室 佐分利 育 代

1. はじめに

創作ダンスは体育の中にありながら表現教材である。そのあり方が学習上の諸問題を生み出す原因ともいえる。

昭和二十二年の学習指導要領改訂以来、創作ダンス学習の指導研究はその具体化に向けて進められてきたがなお指導は難しいとされ、指導者にも学習者にも一種の食わず嫌いを作り続けた。そのことが、学年に応じての積み上げのなさにつながり、再び学習への大きな壁として悪循環をまねいてきた。

幼児や低学年での伸び伸びした運動表現は中学年や高学年で中断されることが多く、結果として、運動表現の能力と言語表現能力とのギャップという一つの壁を作る。中学校で創作ダンスと再会したとき学習者はこのギャップを抱えたままでのぎこちないダンス学習を強いられ、今度は不成功感、そして恥ずかしさという心の壁を作ってしまう。中学校で改めて開始されるダンス学習では、創作ダンスそのものの学習指導よりもまず、どうしたら恥ずかしさを除き学習に参加させることができるかに指導者の精力が費やされるのが実態である。

中川は、恥ずかしさのために踊る楽しさを味わえないのは「動くことへの自信のなさ」からくるとして、その解決法に、①動きになれること、②動きを知らせることをあげる¹⁾。三浦も、リズムカルな動きの連続、非日常的な世界への変身を全てのダンスの共通点とする立場から、リズムによって踊る酔いの世界の体験が創作への意欲づけにつながるとしている²⁾。また、女子体育連盟の研究グループによる課題学習でも、その実践例にリズムカルな動きによる心身のほぐしを行っているものが多くみられる。「音楽によって楽しく踊る」³⁾「音楽によって思いきり動かせる」⁴⁾ことによる心身のほぐしの後、運動課題やイメージ課題による学習を進めている実践例などである。これらの例からは、創作ダンス学習への参加がスムーズに行われにくい現場の様子と同時に、「リズムによって思いきり動く教材」という、体育の教材であり続けるための創作ダンス像、創作ダンス観がうかがえる。このように、リズムによって踊ることの楽しさを充分味わわせてからの創作ダンスへの導入は、取り組み易い方法として一般化している。

しかし一方、「リズムに乗って踊る楽しさは味わうことができても、イメージを動きにして楽しむことはまだ距離がある」と鳥井は指摘する⁵⁾。斉藤も「ダンスウォームアップで楽しく踊った十分間と、次の時間とのギャップは大きかったようだ」と報告している⁶⁾。そして鳥井は日常動作を題材と

した即興表現を多く体験させ、斉藤は実際に動きを観察できるものを学習者に捜させてこのギャップを埋めている。題材を実際に体験させての導入が、リズムカルな動きの体験による導入に加えて行われていると言える。二重の導入によって学習時間は削られ、表現探求の充実感も少なくなることは心至である。

中川が図らずも述べているように、リズムにのり動くことは創作ダンス学習に限らなくても他の教材の中でも体験させられる⁷⁾。創作ダンスは身体運動をともなっているが、他の表現教材と同じように享受と表現を体験させる教材であり、創作ダンスにおけるリズムカルな動きは享受の結果である。体育における創作ダンスの教材としての意味の原点をここに置くことを再確認したい。

谷道は、技能の優劣や勝負への貢献度などが問われる他の運動領域の中で、個性が活かされ新しい自我を切り開いてくれる創作ダンス型のダンスを学校現場の中で見直してみる必要があるのではないかとし、中学校や高校では、個がより活かされる方向の内容の検討が望まれるとしている⁸⁾。また田中や長村の、体験を取り込んでの実践例⁹⁾¹⁰⁾は、これまでの指導、特に体育教材としての創作ダンス指導が、子ども自身による享受よりも表現としての結果、すなわち運動に偏りすぎていたことを探り当てている。創作ダンスそのものとしての楽しさの要素を持ち、しかもリズムカルでダイナミックな運動体験を包含する内容があれば、そして言語表現とのギャップに悩むことなく学習に取り組むことができれば、創作ダンスは体育の中にあっても運動文化のひとつとして特性を発揮できるのではないだろうか。

今回の指導要領改訂で、創作ダンスの他、フォークダンス、その他のダンスも学習内容に加えられるようになった。また、一方では男女共修と背中合わせに、女子でもダンスを選択しなくてもよくなった。今後は、各ダンスの特性をさらに明確に押え、多様な楽しさを学習者に体験させるような取り扱いが必要になると思われる。

2. 「見る」活動から始める創作ダンス学習への方向づけ

表現の楽しさは迫体験の楽しさである。実体験、あるいはそこから得られた心的体験があつてこそ、表現を通して再び楽しみたいと思う。創作ダンスの学習がうまく進まないのは、学習者にこの心的体験、それも運動を通しての体験が少ないためといえる。それは特に、ダンス学習を中断し、言語による体験を豊富に重ねてきた高学年ほど著しい。創作ダンスの学習が話合いでばかりでなかなか運動につながらないと悪評なのはここに根本的な原因があると考えられる。指導者の側でもダンス創作の過程を、「イメージを動きに置き換える」と言い表すことが多いが、この時の「イメージ」が言葉によって得られたものであることがダンス学習にとっての障害になっていることに気づいていないかのようである。グループ表現で、イメージを確認し合うのに必要な話合いもこの障害を大きくしてしまう場合が考えられる。話合いで、表現したいことを余りにも明確に言葉で表現してしまうと、運動は表現媒体として出番を失ってしまう。「動きがわからない」「動きが出てこない」との結果を生む一因ともなり得る。

この障害、言葉のイメージに悩まされないダンス学習を経験することができた。鳥取県立鳥取聾学校での学習である。ここでの第一回目の学習への導入は、タオルの動きから始めた¹¹⁾。言葉の力を借りず、またいわゆるリズムカルな運動によるほぐしを行わないでの創作ダンス学習である。

原体験からのイメージは、筋運動感覚そのものに近ければ近いほど運動を媒体とした表現として眼前化され易いが、そうでなければ言葉や音楽や絵画などで表現した方が最初のイメージに近い場

合がある。言葉のイメージや、リズムカルな音楽を学習の手がかりとして与えることのできない鳥取聾学校でのダンス学習指導の模索は、ダンスで表すイメージは身体や身体の動きを通して得られたイメージであることを再確認させてくれた。そして、動きを通してものを見る活動そのものを練習課題として、ダンス学習に明確に位置づけることへの示唆となった。

創作ダンス学習指導の研究は、創る、踊る、観るのまると体験に視点が定まってきている。しかし創る前提の、動きを通して対象を見るという、もう一つの「見る」活動について明確に位置づけている先行研究は無いといつてよい¹²⁾。この創る活動の前提としてのもうひとつの見る活動、すなわち対象を動きのイメージとしてとらえる活動を明確に学習の中に位置づけることこそ、表現そのものの意味を知らせ、子どもの内的欲求に基づく創作ダンスのまると体験への導入が可能であると考えられる。享受と表現の楽しさ、対象の形や動き、独特のリズムをみつけ、自分の身体の動きを通して追体験する楽しさそのものに近い体験を学習の始めの段階で得させることをねらいとして「見る」活動をとらえたい。動きのイメージとして対象をとらえ、動きを通して表現するダンスへの入り口を少し聞いてみせ、子どもたち自身のダンスの世界を創り出すきっかけ作り、その手がかりを準備するのが指導者の役割である。

3. 「見る」活動から始める創作ダンス学習の過程

見る活動はすなわち、対象を見て自分のものとしてとらえる活動であり、創作ダンスの楽しさは運動を通して「とらえ表す」楽しさである。学習者が対象の何をとらえ、何を自分のものとして受けとめたかの現れがダンスとして観られる形で演じられる。ダンス学習における表現媒体としての舞踊運動獲得の過程はそのまま「とらえ表す」技能獲得の過程であり、「とらえる」技能の深まりの過程でなくてはならない。

学習によるダンス技能の最初の段階を、「とらえられる」とし¹³⁾、「変化させながら続けられる」「まとめられる」と設定した各段階の技能を目標とした創作ダンス学習を、五人の聴覚障害児を対象に行った。学習後の即興表現の特徴について六年間追跡した結果、下記のようなより具体的な四つの技能の段階が認められた¹⁴⁾。

- ①対象の形や動きを身体や身体運動と対応させてとらえることができる
- ②対象の動き・感じの違いや変化を身体運動の違いや変化としてとらえ、続けて表すことができる
- ③一番表現したいことが見つけられ、始めと終わりをもったまとまりとして表現できる
- ④印象づける独自の構成で表現できる

①の段階は身体や身体の動きを通してとらえる、すなわち原体験自体が動きのイメージとして享受される、それだからこそもう一度自分の身体の形や動きで表すことのできる最初の段階であり、創作ダンスへの必要不可欠な動機づけである。この①の段階に向けて学習が抵抗なく興味を持って進められれば、次の段階の技能に向けての学習も意欲的に進められる。特に、言葉での表現力としてはより進んだ③の段階以上の技能をすでに持っている高学年や中学生では、①、②の段階を興味あるものとして体験させ、身体ごと学習に導入することは不可欠である。そして、学習者の身近にあってしかも動きでこそ新鮮な出会いができるものがこの時の原体験のための手がかりとして準備されるならばそれは可能に違いない。

以上の観点よりダンス学習への導入の問題解決法として先人があげている内容を包含し、しかも

創作ダンスそのものの楽しさに直接近づけるための原体験を与えてくれる手がかりとして、表1のような題材を取り上げ学習過程を考えた。特に中学校以上での初めてのダンス学習を想定して、4つの異なる手がかりによる導入部の学習活動をできるだけ具体的に立案した。

表1 「見る」活動から始める創作ダンス学習の過程

学習過程	学習内容	学 習 活 動			
		対象との出会いの手がかり			
		対象の形を真似して	一つの動きを通して	踊ってみて	体験して
対象の形や動きを身体や身体運動と対応させてとらえる	身体の形や動きの手がかりの提示 見る 踊る 極限の動き 動きを内側からとらえる 見る 踊る	新聞に描かれた人のポーズを真似る ◆腕は伸びているよ ◆指も開いている ◆笑っているよ	指導者の動きを真似る 伸びる縮む ◆手の先は天井を突き抜けるように ◆お腹の皮が痛い位に	手を広げたり小さくなったりしながらくるくる回る ◆木の葉が舞い落ちて来る様子を思い浮かべて踊る	風を見よう走る 風が見えたか 身体のどこで 速く走ってピタッと止まる顔で 髪に手に 服に背中におぶかった
心身のほぐしと創作ダンスへの導入	対象の動きと自分の動きの対応 見る 踊る	指導者が動かす新聞君の動きをゆっくり真似る	今の動きがゴムの動きだと知る ゴムを見ながら動く ◆ゴムがもつと伸びるのを知る ◆縮むときに急に縮むことを知る	指導者が落とす沢山の落葉を見て今の踊りを踊る ◆速さや向きが変わりながら落ち、あまり音がしないことを知る みんなで沢山の落葉	走ったり回ったり座ったりして風と遊ぶ ◆空気の動きを知る
対象の動き・感じの違いや変化を身体運動の違いや変化としてとらえ、続けて表す	対象の動きや質の特徴を感じながら踊る 薄い 軽い 折れ曲がる 速い 強い 長い … 見る 踊る	指導者が音楽に乗って踊らす新聞君を真似して踊る ◆人間と違う動きがあることに気づく	指導者がいろいろに動かすゴムの動きを続けて動く	指導者が落とす落葉の動きを踊る 落とすまきあげる 集める 飛ばす	二人組で見つける 二人は人間 一人は風
動きの持つ感情表出性を知る	続けて踊る 見えたまま動く 人間に戻らない	指導者が動かす新聞の動きを続けて動く	指導者がいろいろに動かすゴムの動きを続けて動く	二人組で見つける 一人は新聞を動かす人 一人は新聞 二人で新聞になる	二人で新聞になる
対象の持つ特徴を知る	二人で見つけて踊る 創る 観る	二人組で見つける 一人は新聞を動かす人 一人は新聞 二人で新聞になる	二人組で見つける 一人はゴムを動かす人 一人はゴム 二人でゴムになる	二人組で見つける 一人は人間 一人は風	二人組で見つける 一人は人間 一人は風
友達の発見を知る 色々な表し方があることを知る	見る 踊る 二人でとらえて踊る	二人で新聞になる	二人でゴムになる	二人で新聞になる	音はしないよ 透き通って

色々な特徴があることを知る	見る 創る 踊る	三つ見つけて続けて踊る	もっと長い ゴム, 動きも大きい		いるよ 何色 匂いは 温かさは
色々なとらえ方があることを知る	二組づつで見せ合う 四人でとらえて踊る 見る 創る 踊る グルーピングとグループでとらえる練習のために	↓ ↓	一人がゴムを動かし三人がゴムになる 長いゴム もっと細かい部分まで ↓ ↓	一人が沢山の落葉で遊び, 三人が落葉になって動く 四人で落葉になる ↓ ↓	一人が人間で三人の風を動かす 風は長くつながっているだけかな ↓ ↓
		色々 新聞記 な紙 事 新聞を小 道具に	ゴム こんな の旅 動きを 持つの は他に何	落葉 秋の風 の旅 景	色々 風に動 な風 かせら るもの

4. 「見る」活動から始める創作ダンス学習の実践と評価

表1の学習指導の実践では、学習者の学習への取り組みも積極的で、次段階への発展の可能性も認められたが、学習者の感想をもとに導入段階での問題が解決されているか検証できたのは次の3種類の手がかりからの学習であった。

<p>学習1 「新聞に描かれた人のポーズを真似る」を導入とした大学生のダンス学習¹⁵⁾</p> <p>学習者・鳥取大学教育学部小学校体育実技(2)受講生 期 間・1982年～1986年 学習経過・(1)新聞に描かれた人の動きを真似する→指導者や友達の間を動かす新聞の真似をする (2)色々な紙になる…ティッシュペーパー 段ボール カレンダー 紙袋 (3)見つけた動きを続けて踊る(3つ見つける) 発表する</p>

<p>学習2 「風を感じて走る」ことを導入とした中学1年生のダンス学習</p>

学習者・鳥取県中部の中学校より6～8人ずつ任意に選出した女子74名（うち、小学校での学習は4人が覚えていた。）

日時・1986年11月6日 10：00～15：00（昼休憩1時間）

場所・倉吉市立河北中学校校体育館

学習経過・中部中学校ダンスの集いとして、導入から作品発表まで4段階の計画で実施した

- (1) 風を感じて走る…どこで風が見えたか→風と人間
- (2) 風に動かされるものになる…髪 スカート 他に何？
- (3) 一番なりたいたいものになる…中心を見つけてまとめる
- (4) 発表する…練習 確かめ 発表会
 (作品) 散る花 ゆれる旗 舞い上がる木の葉 砂嵐 風車 秋の一角 たつまき
 こわれた傘

学習3 「伸びる縮む→ゴムになる」を導入とした中学1年生のダンス学習

学習者・鳥取県中部の中学校より任意に選出した女子約60名（感想文を得られたのは39名分だった。）

日時・1988年11月日 10：00～15：00（昼休憩1時間）

場所・倉吉市立河北中学校校体育館

学習経過・中部中学校ダンスの集いとして、導入から作品発表まで4段階の計画で実施した。

- (1) 伸びる縮む→指導者や友達の動かすゴムになる→二人や四人でゴムの動きを見つけて動く
- (2) 伸びる縮む 速さや強さを変えると何みたい？ ばね おもち 湯気 他に？
- (3) 一番なりたいたいものになる…好きなのが目立つように前後をつけまとめる
- (4) 発表する…練習 確かめ 発表会
 (作品) ゴム 想像の花 普通のわかめ 木の葉 しゃぼん玉 ゴム

どの学習も、自由記述による感想を学習直後に得たが、ダンス学習へのつまづきの原因とされている「恥ずかしさ」や動くことの「難しさ」について書いているものはなかった。

恥ずかしさ

学習の感想の中に「恥ずかしい」はなかった。対象と向き合うことで、他人の目を気にすることなく表現に熱中でき、恥ずかしさを感じないで学習に入り込んでいると思われる。

難しさ

「どう動いてよいかわからなかった」の感想はなかった。「風がよくわかった」「自分の意見も入っている」「いろんな意見が出て」（学習2）「けっこう踊れるし、すぐ創れる」「私も負けずに言ってみた」（学習3）等難しさを感じないで学習している様子がうかがえた。「安心感がある」（学習1）ことが動きを通してみる活動を取り入れる価値の一つと言える。手がかりとして与えた題材との出

会いを、明確な動きのイメージを持ったものとして学習者が体験していることが分かる。

これに対し、導入段階で楽しさを見つけているものが多く、そのことが次の段階の学習へとつながっていることが分かった。また、ダンスの学習の場としては最悪とも言える学習2や3でも、導入段階での学習活動がそのハンディを克服する力となったと思われる。

楽しさ

よく知っているはずのものが身体や身体運動と対応させながら見直すと、新しい一面を発見できる。それも友達と一緒に見つければもっと驚く発見がある。「いろいろな感じが踊れて楽しかった」等、「楽しかった」と書いている者が学習2では74名中45名(60.8%)いた。「二人組でゴムの真似をするようになってから特におもしろくなった」(学習3)としているものは39名中29名(74.4%)で、この段階から学習への内発的な意欲が強くなったといえる。

「その気になり、思いきり動けた」「自分の心の動きを感じる」「新鮮な動きをすることができた」「大きな動きができる」と、身体ごと対象に入って行けた楽しさも学習1の感想文にあった。

学習環境

ダンス学習にとって、心を開き、自己表現できるための環境は大切である。にもかかわらず学習2と3は、ダンス学習が初めての中学1年生が、馴みのない他校の体育館にたった1日集まったのものであった。しかも会場校の生徒がのぞきに来る。一緒に学習する友達も指導者も初対面のうえ多人数と悪条件が揃っていた。始めのうちは「どんな人たちだろう」という戸惑いがあったことが感想文からもうかがえた。そして、結果としては、いろんな人と友達になれたことを学習の最大の喜びとしている生徒が学習2で55名(74.3%)、学習3で26名(66.7%)もいた。活発で、お互いに認め合い、高め合えるグループ活動の展開があったことを裏付けている。

すなわち、一人一人が動きとイメージの明確な宝物を持ってグループに参加できること、グループとしてとらえるときにも見る活動に振り返りながら動きでとらえる回路をメンバーみんなが持っていたこと、共通の目標を確認できたことがグループ活動を活発にしたと思われる。

一人一人が友達のよい環境として学習できた満足感は、「人が言ったことを台無しにするようなことはなかった。うれしかった」の言葉にも現れている。(学習3)

さらに、「身体を自由に動かす楽しさと、物を注意深く見ることを教えられた。「今日一日、心と体でいろんな物になって…」「身体全部を使って表現することがこんなにおもしろいとは思わなかった」「自分たちでうまく表現できることがわかって、表現することってすごいなと思いました」(学習3)など、身体やその表現性に気づき、相手の表現に共感したり個性を見つけたりしている感想が多くあった。また一番表したいものを中心に作品にまとめる段階への発展も、様々な題の作品に現れているように可能性を持っていると期待できる。

以上のように、「見る」活動を明確に位置づけての創作ダンス学習への導入は、初めて経験する学習者に学習の第一段階から「とらえ表す」楽しさをまるごと体験させ、「ダンスへの自発性」を持たせ得るとの確信を得た。そしてこのことが、一緒に学習する友達の良き環境として、学習への意欲を高め合う原動力にもなるとの新たな示唆も得られた。

5. 「見る」活動のための手がかり

突然現実離れでき、驚きと発見があり、独特のリズムを楽しむことができれば、そして友達と一緒に発見し楽しむ仲間になれば、学習者は内的意欲を持ってからだごと創作ダンスの世界に入ってくれるに違いない。

「見る」活動のための手がかりとして学習に取り入れる題材としての条件を、導入と次への意欲の2点に分けて次のように考えた。

◎導入・・・身体や身体の動きでとらえるものとしての最初の出会いを体験させられる手がかり

全身でダイナミックにとらえられる ————— 他の表現媒体に置き換えて認識しなくてよい
極限の動きができる

単一の運動要素で真似できる ————— 学習者にも指導者にも簡単である

特有の動きを体験できる ————— 驚きと発見がある

◎意欲・・・次の段階に向けて体験させたいことが明確に提示できる手がかり

繰り返し真似できる ————— 対象特有のリズムを確かめたり楽しんだりできる

色々な感じや動きを体験できる ————— 動きと感じの関係を学習者自身が見つけれられる
友達と確かめあえる
多くのイメージやテーマに発展できる

グループでとらえるものとして発展できる ————— 自分のとらえ方や動きを持ってグループに参加でき、新たな発見もできる

6. おわりに

実際に手にとってみることのできるものを学習に取り入れる方法は従来からあった。けれどもそれは、「動きを引き出すため」であって、「動きとしてとらえるため」ではなかった。対象から主体、主体から身体の動きへのプロセスは同じであっても、前半と後半のどちらにウエイトを置いて創作ダンス学習の内容を考えるかには大きな隔たりがある。「言葉かけ」や「リズム言葉」で表現を引き出している指導例からは、学習者のダイナミックな動きの反面、内的体験の外在化という本来の表現活動を行っているのは誰なのかという疑問を感じることもある。「何をどうとらえたのか」「何を自己のものとして体験したのか」という、もとの体験の部分を学習者に戻さなければならない。身体の動きを通しての実体験、そこでの出会いに驚きの目をもって行動する体験が極端に生活の中から抜け落ちている今の子どもたちの学習にこそこの「見る」活動による導入は必要ではないだろうかと考える。

「様々な種類のダンスのそれぞれの楽しさを体験させる」、「どの入り口からでもダンスのおもしろさに出会わせる」方向に向けてダンス学習を考えようとしているのが今日的な傾向である。リズムミカルな身体運動による表現としてのダンスの中で創作ダンスがどのようなおもしろさの特性を持つものとして学習されるのか、他のダンスはどのようなか明確におさえられなければならない。

学習者自ら、身体と身体の動きでとらえる世界を自分の周りに広げることを最初の目的とし、そして、そこから生まれるリズムミカルな身体表現を友だちと共感しあい、さらに深め楽しむ創作ダン

ス学習を考えて行きたい。

文 献

- 1) 中川憲道 創作型ダンスの学習活動の活性化の工夫 恥ずかしさのために踊る楽しさを味わえない場合の工夫 学校体育 第40巻第2号 1987年 P20
- 2) 三浦弓杖 ダンス指導のあり方をめぐって 学習内容の見直し 学校体育 第41巻第6号 1988年 P74
- 3) 佐藤記美代 表現運動(三の二) 海の中をのぞいたら 「第22回全国女子体育研究大会」報告 小学校の部 女子体育 第31巻第3号 1989年
- 4) 松本千代栄編 こどもと教師でひらく 表現の世界 大修館書店 1985年
- 5) 鳥井典子 即興表現を通して個が生きるダンスの授業 身近な日常動作(マイム)からユニークな表現へ 学校体育 第40巻第12号 1987年 P102
- 6) 斉藤章子 ダンス指導挑戦記 ダンス指導をしてみても 学校体育 第40巻第2号 1987年 P78
- 7) 同1)
- 8) 谷道七郎 ダンス指導のあり方をめぐって 学習過程の工夫を 第41巻第8号 1988年 P75
- 9) 田中順子 よい授業をめざして 一人ひとりが喜んで取り組む模倣の運動 学校体育 第40巻第2号 1987年 P102
- 10) 長村功之 ダンス指導挑戦記 大上段に構えずに 学校体育 第40巻第2号 1987年 P72
- 11) 佐分利育代 動きの世界にとびこんで 女子体育 第23巻第7号 1981年 P26
- 12) 西谷怜子他 表現 ダンス, 学習の体系化をめざして 一幼稚園から高校までの学習内容を考える— 遊戯社 1986年 西谷らは原体験の必要性, 学習への原体験の導入には触れるが, 体験から直接動きとしてのイメージを得るという発想よりも, 言葉など他の表現手段による介在を手がかりとしている。
- 13) 佐分利育代 ダンスにおける技術と学習内に関する一考察 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第20巻第2号 1978年
- 14) 佐分利育代 舞踊運動の発達について 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第23巻 1981年
同 表現運動ダンスの教材論 因伯体育 第6号 1984年
同 ダンスの即興表現の発達について 一聴覚障害児を対象として— 山陰体育学研究 第2号 1986年
- 15) 佐分利育代 ダンス学習における「新聞」の教材化について 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第26巻 1984年

本稿の内容の一部は、日本体育学会第38回大会において「原体験をとりいれた創作ダンス学習指導」として発表した。(1987年9月11日 於、立命館大学)

(1989年8月31日受理)

